

⑨ ヘンガンとセーガン？

「先生、いよいよ、この子も高校に行きますねん」

「早いものですね。がんばってください」

「それが、この子、『ヘンガンではあかん』と言われてますねん」

何のことだろうと思いました。いろいろ聞いているうちに、進学についての3者懇談で、担任の先生が「希望されている公立高校は高い競争率が予想されるから、私立高校も受けておかれてはどうか。しかし、A高校の場合は『専願』なら可能性はあるが、『併願』では無理でしょう」とおっしゃったようでした。

中学校に勤務している私たちにとっては、毎年の進路指導の中で使う言葉です。しかし、このお母さんにとっては、専願や併願という言葉は初めて耳にされた言葉だったのでしょう。ですから、「セーガン」や「ヘンガン」と記憶されてしまったのに違いありません。

翌年、3年の学年主任を務めた私は、こうした言葉の意味を分かっていたくために、全体の場で「専願」と「併願」を黒板にしっかりと書いて、次のように説明しました。

高校入試では専願や併願という言葉が出てきます。専願というのは、「ほかの学校に行くつもりはありません。この学校がこの子にとって一番の希望なのです。ぜひともこの学校に入れてください」ということであり、併願というのは「ほんとうはこの学校には行きたくないのです。本人も私もB高校がいいなあと思っています。でも、なかなか難しいようです。B高校が駄目ならこの高校にします。だから合格させておいてください」ということなのです。あなたが、こうした高校の先生だったとしたら、どちらの生徒を合格させますかと尋ねますと、「それは専願ですよ」という答えが返ってきました。意味が分かれば

当然のことです。しかし、その意味が分からないまま、単なる音声として聞く場合には、「ヘンガン」「セーガン」となってしまうことがあるのです。それぞれの仕事に、いわゆる業界用語があります。お互いに分かり合っている中では、そのほうが短く言えるなどのメリットがあります。しかし、その仕事にあまりかかわりが無い人の場合、分からなかったり、意味を取り違えたりする心配があるのです。

それから10数年後、学校教育課に勤めていたとき、M課長から「言葉を省略して短くするのではなく、きちんと言いなさい。先日こんな電話がかかってきて意味が分からず困りました」というお話がありました。課長への電話で、相手の方が「こちらは、キョウサイレンですが…」と話されたというのです。とっさのことでどこからの電話か分からず何度も聞き返したということでした。

「私にとって『キョウサイレン』は、『恐妻連合会』ですからね」というのが、普段は謹厳実直な課長のお話でした。

当時は、教職員課に行くときに「教職に行ってくる」と言ったり、教育センターから来た文書のことを「教センから来た文書」、奈良県文化会館のことを「ブンカン」と言ったりしていました。忙しい中で、できるだけ短く言うのも大切です。教職員課からの文書には「教職第23号」、教育センターからの文書には「教セン第53号」などといった文書番号が書かれ、これが定着しているのですから、当然のこととも思いましたが、部外の人たちには1つの隠語のように聞こえ、このことで迷惑をかけていたのかもしれない。言葉を正しく理解することは、互いの意思疎通のために大切なことなのです。

別に、閉鎖された空間を作っているつもりはありません。しかし、外部の方が見聞きされて、閉鎖的と思われるようなことがあれば残念だと思います。